



2017 年 6 月 吉日

森と海の自然科 活動案内 「川と街道を訪ねて」No.4」

神崎川と旧西尾家（吹田文化創造交流館）見学 ー資料ー

神崎川

天平年間、行基により摂播五泊（室生泊、韓泊、魚住泊、大輪田泊、河尻泊）の一つとして河口に河尻泊が築かれた。785 年、奈良時代末期に和氣清麻呂の手で、長岡京遷都に伴って新首都と瀬戸内海を直接結ぶ目的で淀川と直結させる工事が行われている。この淀川との直結工事以前は、神崎川は淀川水系と別の水系であった。淀川河口の難波津が淀川水系・大和川水系の土砂の堆積で機能を失う中、河尻泊は大阪湾と京を結ぶ港として繁栄し、神崎川中流の吹田、淀川との分岐点の江口も港として繁栄した。

平安時代後期には、神崎川沿いには貴族や寺社の荘園が開発された。河口部の神崎の港は海上・河川の物資積み替えや、京から西日本各地の荘園や住吉神社詣でに向かう貴族や庶民で賑わった。また、神崎と江口はともに遊女の集う「天下第一の歓楽の地」としてライバルとなり全国に知られた。平安時代末期には、さらに下流に広がった新しい海岸に大物と尼崎の港が形成されている。鎌倉時代には、荒れ気味だった港を東大寺の再建造営を任されていた重源が再建し、奈良や京都にできる巨大な寺社の材木を集める港として、また瀬戸内海の物資を集める港として栄える。戦国時代に尼崎の港は大覚寺や本興寺を中心として、堺や平野などと同様な自治都市になった。

江戸時代には尼崎城が建設され尼崎は尼崎藩の城下町になった。神崎川の水運は、大坂や堺などの発達でかつての重要性は失ったが、神崎川・淀川を通して京と尼崎を結ぶ過書船などでにぎわった。吹田は渡し場となり、大坂から丹波へ向かう亀岡街道の渡河点となった。また、下流の三角州や湿地帯は新田として開発が進められた。

1878 年（明治 11 年）に、淀川に分岐点から、安威川の合流点までを直線的に結ぶ付け替え工事が行われた。それまでは、摂津市一津屋の分岐点から北上し、摂津市内でほぼ直角に西に曲がり、安威川と合流していたため、洪水の原因となっていた。工事の開始は 2 月 19 日完成は 7 月 17 日で、長さ約 2750 メートル、幅約 73 メートルの新たな川道を掘った。この明治の付け替え工事は、明治政府のお雇い外国人であったオランダ人ヨハニス・デ・レーケが指揮を執った。その後も、淀川の改修にあわせ神崎川も何度か改修され、淀川に分岐点から西にまっすぐ進み安威川に合流する現在の形になった。

明治以降は尼崎港の近代化と工業化が進み、紡績工場などが川沿いに立地した。特に尼崎では 1928 年に浅野財閥の浅野総一郎らが設立した尼崎築港株式会社による臨海部の築港開発により、発電所や鉄鋼産業などを中心とした重化学工業地帯が形成されて現在のような姿になった。ただし工業用水として地下水をくみ上げたことによる地盤沈下などが下流部全体で進み大雨や高潮に対し脆弱になった。また工場は煤煙を吹き出し、工業排水による汚染もすすみ、神崎川は悪臭を放ち始めた。

戦後防潮堤整備や川底の浚渫、下水道の整備などでこれらの問題解決が図られ、ようやく神崎川も多数の生き物の住める川になっている。しかし、かつての汚染物質はヘドロとなって川底に堆積し、ダイオキシン類の底質環境基準を超過している^[1]が、その改善に向けて河川管理者の大阪府や国土交通省など多くの主体が取り組んでいる。

Wikipedia より

江口の君堂(宝林山普賢院寂光寺)

東淀川区南江口 3 丁目 13-23

そのむかし、仁安 2 年(1167 年)の秋、歌人西行法師が天王寺へ参詣する途中、江口の里であいにくの時雨にあい、一軒の粗末な里家で雨宿りを乞うたのです。しかし、女家主の遊女妙(たえ)はその申し出を拒みました。そこで、西行が「世の中をいとふまでこそかたからめかりの宿りを惜しむきみかな」と歌を詠むと、「世をいとふ人としきけば仮の宿に心とむなと思ふばかりぞ」と見事に返歌しました。その即興の歌が縁となって後に妙は仏門に入り、余生を人びとの相談ごとにあてたそうです。妙(光相比丘尼:こうそうびくに)の亡き後、江口の人びとが、冥福を祈って建てたのが、江口の君堂だといわれています。

光相比丘尼が普賢菩薩の化身だったということから、明治のころには子宝に恵まれるよう祈願に来られる方も多かったそうです。

現在でも、境内には手入れのいきとどいた約 40 種類の樹木が繁り、そのひっそりとした佇まいは、都会の喧騒を忘れ、静かな心にさせられます。

(「広報ひがしよどがわ」)

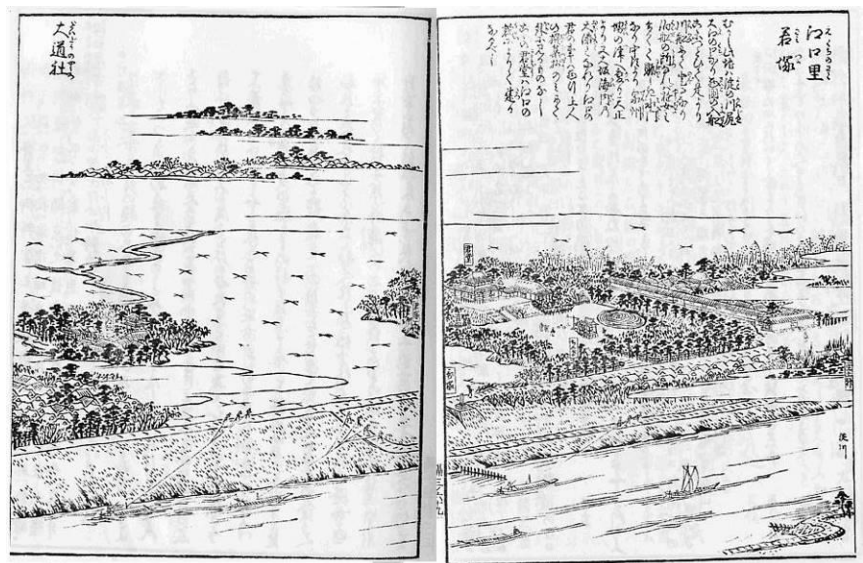
吹田の渡

このあたりは、もと神崎川の船渡しであった吹田の渡があったところです。この渡は大坂から丹波へ向かう亀岡街道の渡で、西国街道にもつながり、また、古代では三島路であったとみられる交通の要地で、『摂津名所図会』などにも記されています。

かつて、三国川と呼ばれていた神崎川は、奈良時代末期に淀川と直結し、京都と西国をつなぐ水路として発達しました。そのころから、吹田は津(港町)として栄え、また、その景勝をたたえて、貴族達が訪れました。鎌倉時代には西園寺公経が別荘「吹田殿」を設けたことでも知られています。

室町時代には水運はますます盛んとなり、江戸時代には、過書船株を持つ家がありました。明治になって鉄道が開設され、水運が衰え始めましたが、昭和初めまでは吹田浜には回漕業者があつて、賑わっていました。

吹田の渡は、もとは川幅も広く、堤の間の約二百三十間があり、ここを渡し船が通いました。江戸初期では渡し船は一艘でしたが、幕



摂津名所図絵 江口里 君塚 大道社



摂津名所図絵 吹田渡口

末には五艘になっており、一艘に三十人、牛馬五頭を乗せることができました。明治八年に渡し船は廃止され、有料の高浜橋が架けられましたが、神崎川の付け替えによって、新たに高浜橋が架けられ、この旧橋は大阪府に寄付され、修築されて現在の上高浜橋になっています。

昭和六十二年三月 吹田市教育委員会

一津屋樋門

一津屋とは、平安時代の倉庫・運送業のことです。神崎川が淀川に合流するこのあたりには、諸物資を取り扱う基地が設けられていたといわれています。一津屋樋門は、淀川改良工事で神崎川を締め切ったとき、従来どおりに神崎川の流水を確保するため、神崎川分派点に設置された施設です。当初は神崎川樋門とよばれ、明治 38 年(1905) 6 月に完成しました。その後、淀川修補工事で撤去され、新たに一津屋樋門を築造されることとなり、昭和 36 年 8 月に完成しました。そして、平成 2 年 3 月に改築され現在に至っています。

淀川資料館 資料より

吹田市旧西尾家住宅(吹田文化創造交流館)

重要文化財 旧西尾家住宅

関西地方における都市近郊の大型近代和風建築として価値が高く、屋敷全体の構成を完存している点も貴重であるとして、平成21年(2009年)12月8日に国の重要文化財に指定されました。

指定の建造物の構造及び形式

建物等の名称	面積(㎡)	構造	建築年代
主屋	498.69	玄関部、居住部、計量部屋部からなる	明治28年 (1895)
玄関部	72.22	木造、棧瓦葺、北面居住部に接続	
居住部	285.61	木造、一部二階建、棧瓦葺、渡廊下・浴室棟・客便所棟附属	
計量部屋部	140.86	木造、棧瓦葺、西面居住部に接続	
積翠庵	44.69	木造、棧瓦葺一部銅板葺	明治26年 (1893)
離れ西棟	171.22	木造、棧瓦葺一部銅板葺	大正15年 (1926)
離れ東棟	92.91	木造、棧瓦葺、表門・渡廊下附属	
戌亥土蔵	63.24	土蔵造、二階建、本瓦葺	明治26年 (1893)
戌亥角土蔵	22.05	土蔵造、二階建、棧瓦葺、蔵前附属	明治35年 (1902)
米蔵	39.99	土蔵造、本瓦葺	江戸後期
宅地	4,542.37	地域内の納屋、庭門、四腰掛、石灯籠、防火水櫃、湯釜基礎部含む	

登録記念物 旧西尾氏庭園

茶室積翠庵周りの庭は、茶道家内家第10代休々斎と、その養子である節庵の指導・監修のもとに、数内家出入りの職人によって作庭されたものです。作庭当時の姿を良好にとどめ、近代における露地の在り方を現在に伝える重要な事例として高い評価を受け、平成25年(2013年)8月1日に国登録記念物(名勝)となりました。

- 開館時間 午前9時30分～午後4時30分
(入館は午後4時まで)
- 休館日 毎週月曜日、年末年始
(12月29日から1月3日)
- 入館料 無料



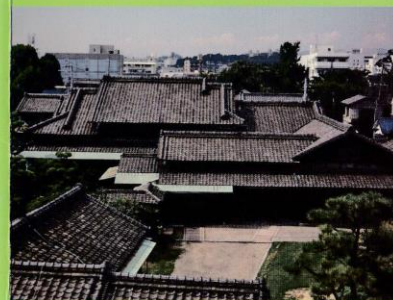
〒564-0032 吹田市内本町2丁目15番11号
電話 06-6381-0001
JR「吹田駅」より 徒歩 15分
阪急電鉄「吹田駅」より 徒歩 10分
※専用駐車場はありません。お車でご来館の方は
周辺のコインパーキングをご利用ください。

吹田市教育委員会

リーフレット作成にあたって、梅原章一氏から写真の提供をいただきました。
このリーフレットは3,000部作成し、一部あたりの単価は13円です。

— 重要文化財 —

旧西尾家住宅 (吹田文化創造交流館)



西尾家は江戸時代、吹田村の仙洞御料の庄屋をつとめました。こうした伝統を受け継いだ第11代奥右衛門義成と第12代義雄によって、明治中期から昭和初期にかけて建築・整備されたのが、現在伝わる建物や庭園です。

建物が国の重要文化財、庭園は国の登録記念物(名勝)となっています。

旧西尾家住宅のみどころ

旧西尾家住宅は、近代の生活や文化が見事に体现された和風住宅建築として極めて優れたもので、ここには近代以降の豪農の暮らしぶりはもちろん、茶人として、和学から洋学を修めた2代にわたる近代の教養人の暮らしが見事に反映されています。

離れ

西(和室)棟と東(洋室)棟で構成されます。設計は、近代日本を代表する建築家の一人である武田五一によるもので、武田の住宅設計の考え方や建築デザインが凝縮された建物です。



庭



積翠庵

京都茶道家内家の茶室無庵写しと雲脚写しを、水屋を中央に介して繋ぎ一棟の茶室としたもの。



主屋

居住部・玄関部・計量部屋部の3棟で構成され、玄関部2室、居住部2室に戸を切りします。

主屋としての伝統と格式を引き継ぎながら、第11代の豊かな趣味が品よく活かされています。



吹田市浜屋敷(吹田歴史文化まちづくりセンター)

